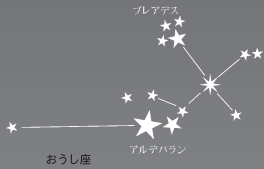


ポラリスを仰ぐ北の大地から



「風邪」について考えたこと

渡島医師会 会長 宮村 拓郎

十数年前のある日の診察で、発熱と胃腸症状のある患者さんに「風邪の一種」と説明したところ、胃腸症状が悪化し他院を受診した際に、急性胃腸炎と言われたため誤診ではないかとクレームがありました。説明し納得してもらいましたが、誤解を招かないためには「風邪」「お腹にくる風邪」「ウイルス性胃腸炎」というものを患者さんがどのように理解しているかを知っておく必要があると考えました。そこで「風邪」に関するアンケート調査を行ったところ、発熱と胃腸症状がある場合、風邪、風邪の一種と思う人が9割で、風邪ではなくウイルス性胃腸炎だと思う人は1割という結果でした。当時はウイルス性胃腸炎は「お腹にくる風邪」という言い方をすることが多く、多くの患者さんは、風邪の原因となる病原体が胃腸炎を引き起こすと考えており、胃腸炎にもかかわらず、市販の感冒薬を服薬したり、感染経路についても間違えて理解している人が多く見られました。

「おたふくかぜ」というように、昔はウイルスによって人から人に感染していく病気は「風邪」という言葉が使われていましたが、それぞれのウイルスが同定され、病気の診断ができるようになった現在では、インフルエンザを「風邪」と言ってしまうと誤診と言われてしまいます。同じように、ウイルス性胃腸炎は、風邪症候群を引き起こすウイルスとは異なる、ノロウイルスなどによる感染症であるということを説明し、きちんと理解してもらうことが必要です。このことは、テレビやインターネットにより患者さんの情報収集力が高くなった現在ではさらに大切であり、安易な方向に流されやすい私としては、あらゆる病気について、患者さんの知識と理解度に合わせた丁寧な説明が欠かせないと自分に言い聞かせている次第です。



命がけの患者輸送

檜山医師会 会長 経田 剛

昨年から今年にかけて、数十年ぶりの寒気の襲来による大雪、猛吹雪には日本中が困惑、毎日のようにテレビ、新聞、ネットなどで報道されています。

私の幼少期、情報を得る手段はラジオ、新聞でした。父は開業医で、当時の住居は診療所（有床）と一緒にした（私に言わせると『住み込み』現在も同様な感じ）。この大雪、猛吹雪で振り返ると、夜間突然ドンドン叩く音、外で待つのは馬そりの迎え、往診の依頼でした。当時はマイカー、タクシー等は無く、交通手段は当時の国鉄とバスのみ。車が走っていない時間帯は、最寄りの駅から人力トラック、馬そりに乗り毛布に包まって往診に出かけた父の姿を思い出します。今では救急車が普及し救急搬送は業務となっております。

H27年2月からドクターヘリの運用が開始され、檜山管内での出動件数は、H27年61件、H28年195件、H29年168件でした。函館まで約15分で到着するので救急車と比較して大幅な時間短縮になりました。またH29年7月からドクタージェットが就航し函館から札幌への患者輸送が大幅に時間短縮となり、重症患者にとって大きな恩恵が生まれました。悪天候や有視界飛行が困難な時はやはり自衛隊のジェット機の運用となります。

H29年9月13日、緊急空輸のため丘珠空港から函館空港に向かう途中、大変不幸な事態が発生し若き隊員4人が犠牲となりました。任務とはいえ残された家族の事を思うと心中察するものがあり、追悼の意を表するとは言いようがありません。このような痛ましい事故があり、私なりに危惧しておりましたが、当地の消防署長と話す機会があり、自衛隊は今回の件にめげず、やる気満々ですとの話を聞き安堵しました。向後の患者搬送は安全かつ迅速に行われることを切に願っています。